寝床屋の
無料配布
時代屋

・遊女ノ景……3
・番太ノ景……21

遊女ノ景

朝靄が欄干の先にうねうねと漂っている。まるで遠い昔に見た細波のようだと思う。

「…主さん」

白くうねるそれを〝なみ〟だと教わったのは父親だったのか、それとも女衒の男だったのか、それすらも覚えてはいない。

「うぅ…」

「主さん、起きなんし」

明烏の鳴き声を聞きながら客を起こす。支度を調えるまでを待ってから階下に降り、いつもと同じように後ろ姿が見えなくなるまで見送った。あのお馴染みはめっぽう寝起きが悪い、今日も寝ぼけ眼のまま夢の中を彷徨うかのような足取りで迎えに来た引き手茶屋の者の横を歩いていた。あれで末は大店（おおだな）の若主人というのだからひとのよい千々石（ちぢわ）女郎はついこのひとの身代はだいじょうぶでおすか

ねェ、とおもってしまう。ぼんくらには手練手管の女郎もふいと弱まる。ましてや最近遊びを知ったといううぶな年頃だ、どんな客のあしらいも、袖の振り方も色恋の舞台を演じ上げるのは慣れたけれど、おんなの性なのだろうか、弱くなる者にはどうしたって弱い。

「…あーァ…」

欠伸をしながらほてほてと廊下突き当たりの部屋に向かう。さいわいぐずぐずした姿を晒そうとも禿も付いていない、誰一人としてそこにはおらず、しんとして部屋持ち女郎を見咎める者は誰もいなかった。

「……」

ちらと浮かんだあどけない男の寝顔に我知らず笑みを浮かべる。

靄の海はゆるゆると晴れゆくが、まだ遣り手に預けた禿も寝ているはずだ、昨日はどことなく機嫌が悪かったからどこか具合でも悪かったのだろう、寝てすっきりして熱など出ているのでなければいいが、とつらつらと考えて襖を閉めたら閉めたでぱたりと夢の中に沈み込んだ。

明け七ツ、そろそろ門の外が目覚め、一日が始まるころである。
初夏の眩しい光が打ち水した仲の町の通りにうっすらと降り注いでいた。風が渡ればゆらゆらと盛りに咲いた菖蒲が色とりどりに揺れる。紋日を過ぎても花は尚も、美しい。
「次はきっと…」
どこからか妹女郎のねだり声がする。近くでしているから廊下から筒抜けだ。
何を、と確かめようとしたが途切れ途切れの声はやがて溶けたように聞こえなくなった。やがて柔らかな静寂に釣り込まれる。
夜を深く過ごす女郎は、一度客を送った後、門の内側で二刻半ばかり経った後から起き出し、生活を始めるのだ。
――――いつか、きっと……。
深い静寂の中に小僧の幼声が響いて溶けた。

千々石が目覚めたのは四ツ、振袖がせっせと見世の拭き掃除をしているうちに湯を浴み、食事も昨晩の残りで済ませた。そのまま内所を通過して遣り手の部屋に行き、どうかと問えば禿は存外元気でけろりとしている。慌てて損をした気分になった。千々石本人はそれとなくしたつもりだったが、同じに見世を張る女郎達が母親みたいだの、と冷やかして笑っていた。いとけなく、頑是無いせいか禿にはつい甘くなってしまう。下に兄弟もいなかったから扱いを知らない、だから当たり散らすこともあるが、優しく育てて悪くはならない、と贔屓である旦那からとくと聞いてしまうとそういうものかと納得してしまう。

千々石は生家の覚えがまるでない、両親の顔もうっすらだ。でもあそこはいつも寒くて、お腹が減って、かなしかったことは覚えている。暗くて、怖いことばかりが家には詰まっていた。この見世(みせ)に来て怖いのは消えたわけではないけれど、寒くないことや怖いことが膨らんでいかないことにほっとした。帰る家はない、けれども身をさっぱりして、美しい着物を与えられる。飢えることもないし、寝床もあたたかい。苦界と言われる場所だけれど、心持ちは緩んだ。きっと禿も、

他の花魁達も同じような事を感じているだろう。
「おいらん、おいらん、飴が欲しい」
早速ねだりもする。こう甘えるのは、自分のせいだろう。ぴしりと手を叩いた。
「てぇげぇにしなんし。髪結いは来なすったかェ？」

昼八ツ、昼見世である。
出入りの文使いや髪結いが来て、無沙汰の客に文を書いたり、あれこれとしていると若い衆が『湯をしまいます』と触れてせき立てる。そろそろ刻限だと悠々と過ごしていた女郎達に告げるのだ。その頃には支度は出来上がっているが、昼見世は世間のお役人や商人、職人がせっせと仕事をしているなかなのでとかくに暇である。さて、と千々石も子供（禿）を連れて外に出た。居ても居なくてもさして障りはない、気儘に茶屋の床几で過ごして子供達を遊ばせたり、揺れる菖蒲でも眺めながら茶屋の者と話すのだ。茶屋は目抜き通りである仲の町の通りに並

んでいる。そうしていると自ずと情報が集まってくる、馴染みがよその見世の女郎に心変わりしたらしい、昼三と客を取り合った振袖がいる、どこぞのお大尽にどうやら落籍(ひか)されるのが決まった大籬の某花魁のこと。

柔らかな日射しが降り注ぐ京町の通りを遊冶郎気取りのひょろっとした本多髷が歩いている。

蔵前辺りの大店の息子といったところだろう、白い面長の面にのっぺりと墨で書いた細目、鉤鼻、ちょぼ口を乗せている。黄八丈に緩い縞の帯、羽織を肩に掛けてぶらぶらしている。右目の下に黒子があるのが強いて見分けがつきそうな特徴か。

「……」

ぷかと煙管を遣りながらそれを目で追う。相手は視線に気付いたらしい、せかせかした歩き方が少し緩んで背がしゃんとなった。

「おや、若旦那」

茶屋の横から桶を持って現れたおかみに声を掛けられた。おかみも千々石の様

子に目聡く気付き、声を掛けたのだろう。
「ヤア、お久しゅう」
立ち止まって若旦那はにこりとする。
「ほんとに、お見限りで御座いましたね。どうなさいました？」
云いながらおかみは千々石から少し離れた腰掛けに若旦那を誘う。
「それがねえ、三月ほど親父に土蔵の中へ入れられてしまってねえ…」
しんみりと膝の上に手を重ねて言う。
「お店の金に手をつけたなどととんだ濡れ衣を着せられちまってねえ、遊ぶためにこつこつくすねたなんてサ」
「まあ。それはたいへん」
「ああ、ありがとう。おていちゃん、久しいね、元気かい？」
茶を出してきた茶屋娘の頭を撫で、店の者の同情の目を向けられて尚も芝居がかったように若旦那はふるった。
「ま、結局はうちの小僧の悪ささ。こっぴどく叱ってやったけどもね」

「それはようございました。若旦那のせいじゃないって分かって何より。でも三月は長かったですねえ」

ちろりと他の岡場所へでも…などと匂わせるような探りをおかみはさり気なく入れる。ここいらが上手だ、引き手茶屋は、客と遊女屋を繋ぐところだ、斡旋所といってもいい。きちんとした張り見世などはここを通してやっと安心して遊べるのである。当然、信用のために客を見定めることもある。おおっぴらには見せないが、客を試すことも時にはするのだ。

余程ちやほやされて嬉しいのか若旦那はあれこれと問うてくるおかみの様子に気付く風もなく、つるりとした顎を撫でながらていねいに答え、

「神田の『千膳屋』ってお知りかェ？　そこの新助ってぇのにやっと助けて貰ったのさ、石部金吉なんだけどもね、昔馴染みでサ」得意気に続けた。

――――どくん。

千々石の胸が鳴る。

黙ってそっと額の生え際にある傷跡に触れた。

聞けば、その若旦那と神田の料理旅籠『千膳屋』の倅、滝蔵は手習いと道場が一緒だったらしい。今でも付き合いがあり、ちょこちょこ遊んではいたが、先達っての若旦那の騒動は、火の粉が何故か滝蔵の元にまで降り掛かってしまった。そこで担ぎ出されたのが、滝蔵が小僧の頃より連れ回している手代、新助だったそうな。新助は帳簿はもとより店の中、その出入り客や奉公人の何から何までを丹念に調べつくし、小僧の悪さをそっと咎めたという。いやはや若いのに、ねばり強く、とても真似できないと親父共々舌を巻いた、と誉めているのか貶しているのか分からない物言いで話を括らせた後、若旦那は茶を啜った。

「知ってますよゥ、新さん。ちっさい時分からここいらをウロウロ」

おかみが笑う。

「辰の兄さんを探すひとでしょう？」

盆を抱えたおていがそっと口を挟む。若旦那はそう、と云って膝を叩いた。

「大門に通うってのに見世にあがらないんだ、ありゃ」

カワイソウだねえ。と嘯くのを、おていは首を振る。

「……ああいうひと、いいなあって、姐さん方は云うんですよ」
「――――え？」
――――どきり。
聞き耳を立てていた千々石こそ、煙管を落としそうになる。まさか。でも。
「やぼっていうよりも心がきれえで、粋な匂いがするって」
うららかな昼下がり、人通りの少ない茶屋の一画で張り裂けるような若旦那の笑い声が響いていた。

暮六ツ。夜見世が始まる。
日が沈む頃から町屋との境を隔てた壁の向こうで駕籠屋の声や、ぞろ人脚の音が聞こえ出す。日本堤から猪牙を乗りつけて来る者、歩いてくる者、駕籠でやって来る者、大門にやって来る客はそれぞれだ。
一刻前にひけた昼見世とはまるで違う。細見売りの声や、門脇の蕎麦屋で腹拵

えをするお店者（たな）、地廻りやらが騒がしく姿を現しはじめ、賑わしい。
「…ジャァあるめぇし、こいのうすいのとゆうはりが有るもんか、ッてね」
「サァコレはコレは」
軒行燈に灯が点り、やがて見世出しの鈴が鳴る。華やいだ通りに登楼の客達が引きも切らず波を作る。すががきから漏れる三味線の音、早速、小見世では素見（ひやかし）の客が来いだの来るだのと籬越しの遊女とやり合っている。
「ここへ来て、そねぇなにくいことを言いおすか」
「ケッ、言いやがるゼ」
千々石女郎は部屋持ちの昼三、女郎のうちでは値が張る。とはいえ、大籬の太い見世というわけでもないから、べらぼうな高さというわけでもない。左の額の生え際にうっすらと傷跡を持ち、美印にそこがまた花を浮き立たせるとも熱を冷めさせるとも云われている。のどの通りが良く、謡いはいっちと褒めそやされている。傷は禿であった頃のもの。痛くはない、今ではいとおしいと、撫でさする。その顔にうっとりみとれる遊客は数知れない――――。

部屋には今朝送り出した馴染み客からの文が届いていた。はやいものである。朝とも知れぬまま花魁に送られ、気付くと家に着いていた。親爺殿は〝居続け〟もさせず、寝坊助息子になんと感心な相娼だと花魁の心証はたいそうよいから身請けの夢も遠からじ、とある。

夢は夢で、虚と実の隔たりは大きいものだ。けれど返事は書かねばならない、適当な歌を書いて使いに持たせてやる。よほどきつく言いつけられたものか、廓だというのに芸者衆にも目も呉れず、若いお店者の顔はずっと神妙そうだった。

「新助だって…」

ふっと息を吐き、呟いた。青々しい月代の剃り跡、少し掠れ掛かった声だった。なつかしい。

「……」

あんなふうに言われるのも横顔が売り出し中の役者に似ているからだ、そうに

違いない。

――――心がきれえで。

確かにそうだ、と千々石は思った。きらりとした目だ、潤って澄んでいて、ずっときれえなままだ。知っている、その男のことは十分に知っている。禿の時分から知っている、見ている。目を合わせることが恥ずかしくなったのはいくつ頃になってからだろう、見世にあがったのはほんの四回。通わなければすぐさま忘れてしまうのに三月どころか半年も顔を見せない。それなのに色濃く記憶に残ってならないにくい客だ。

『おれが、買うから!!』

金切り声に近かった。

『絶対に、この先の一生を買うから』

てんで遊びも知らない、乙粋な言葉も思いつかない不通介（やぼすけ）さんが。

鼻で笑ってしまう。それなのに胸の内はかたくなってやわくなって、ちっとも思い通りにならない。

あのとき、頓狂な声に言葉に、傷なんぞを抱えて辛いと泣いた涙はぴたりと止んで目がぱちくりとなったのは相手の思惑にみごとにはまったということなのだろうか、今となっては分からない。言葉はぽとんと当たって、当たって、千々石は鼻がつんとなった理由を知らない。遊女のありふれた偽言を真に受け、何も知らないのに、と、むっとしたのが何だか見えない袋に吸われて、しんとした。目を合わせた。嘘に隠した本心を見抜かれた、と感じた。ぽっと手が温かくなった、怖くもなかった。

『ちっとくらい傷があった方が、か、かあいい。コイツで売れないってンなら、お…、わ、私で我慢すればいい』

ただ、新助の言葉がこれまで聞いた幾千の言葉よりも甘く、響く。同じような甘言をいくつも聞いたのに、今も思い出す度にこころが飛び上がるほど、こんなにも嬉しがる。

どうして。

『私には、み、見えましたから』どうしても。

ここは誰もがいっときの夢を見てよい場所である。
――――我慢しやりやす。
『新助はうつけ者だ、水が違う。苦労するぜ、花魁』
兄貴分の辰次は自分が連れて来たというのに茶を言った。唆しているのか、さびしそうに笑って、この吉原雀はひとが悪い。神田きってのバケモノは料亭旅籠『千膳屋』主人の守り札と云われている、その辰次を慕い、可愛がられたのが手代の新助だった。いつも主人や辰次の後をついてちょこちょこと歩いていたのに、いつしか大きく賢くなって、学者相手に時に学ぶことすら許されたと聞いていた。
水が違うのは百も承知だ。お店のまっとうな奉公人と半生を吉原で過ごした者が幸せになれるなど保証はない。町中のちゃんとした娘と恋仲になったら千々石はそれこそ身を引くしかないし、この身の掛かりだ、身請話でも持ち上がればそれこそ断る理由もない。遊女は馴染み客が通っているうちだけ花咲き、あとは萎むだけ。幼かった千々石を禿として手元に置いた花魁はもういない、病を得たと

聞いたきりどうなったのかも分からない。落籍れていった花魁達は全部が全部仕合わせでは決してなかった。いつか心が離れ、貧しい生活に疲れて廃れ、この苦界よりも苦しい地獄に落ちようことも、（羅生門）河岸（かし）に戻ることだってある。

――――そねェなこと知りておりもうす。

「おいらん、手紙」

夜四ッ、客の一人が帰り、裾を引き引き待たせてある別の所に行こうとすると、階段から上がってきた別の花魁の禿がそっと懐から懐紙を差し出した。一緒に飴でも貰ったらしい、振り返った片頬がこんもりと膨らんでいる。受け取ってかさりと覗き込むように開いた。

「あっ…」

新しい墨の匂いが香りがつんとする。月に二度三度は必ず向こうから付け文が届いた。達筆な字で流れるよう書いてあった、もうじき長雨の節になるから呉々も用心しろと候文の堅苦しい文面は内容までも本当に素っ気ない。ああ、でも見慣れている字は、見えないところからぞろいおとしい相手の気持ちが滲み出るよ

うで。
『花魁』
ほら、じんとする。痛くて、苦しい。
会いたいと思うと図ったように千々石に届く、まるでこころは繋がっているとそう示すかのように。――――気にしている、会いたい、いとおしい。
「花魁、どうしたィ？」
背後で廻しに訊かれる。袖で顔を隠しながら懐紙を帯に捻じ入れる。緩く首を振って、ちょットさしただけ、と短く云い繕ってから息を吐き、身を入れるようぴしゃりと襟を引いた。
「今日は何人だ？」
「四」
「精が出るねェ」
冷やかすような廻しの言葉に千々石女郎は宛然と微笑してみせる。
『いつか、きっと、必ず』

この嘘ばかりの廓の中で、どうしようもない恋をしていると思う。
――嘘になってもいい。
わっちは嬉しゅうて堪らなかった。
胸高にした帯の辺りにほっこらと神様が居る気がしている、泣きたいくらいに切なくて、それでも滅法界花魁は幸せだった。

――　かわなを　筆

（『時代屋』より加筆修正）

番太ノ景

また、番太は寝ているようだ。

「チョッチョッ」

芳之助は、傍を歩いてきた白い猫を招き寄せた。猫は芳之助の指先をふんふんと嗅ぐと、興味を失ったようにぷい、と立ち去った。

あの女房、本当は木偶かも……。さっきからちょくとも動かねェもの。

「芳坊、おまへこンな所で何しておいでだ」

頭から降ってきたような恐ろしく低い声がしたと思うと、耳を思いっきり引っ張られた。

「アイタ、、、、、おッ母さん」

「おまへ、お手習いに行くと言ったじゃねェか。早く行ってお習い」

湯に行く途中の母に見つかって、吉之助は風呂敷に包んだ道具を抱えなおすと、名残惜しげに走り去った。

母はその後姿を見ながら、やれやれ、と溜息をついて、木戸番の小屋を見やった。

店番は番太の女房だ。草履、下駄、鼻緒を挿げ替える破布、お六櫛、粗末な簪、鼻紙、蓑、油紙など売れてるのかどうかさえ怪しいような小間物を扱っている。

その証拠に女房も眠そうだ。染みが浮いて皺の目立つ顔に最近では目でも悪いのか、眉の位置がちぐはぐだ。やせ細って、髷が結えているのが不思議なほど薄くなった頭髪のうだつの上がらない男によく連れ添っている。

番太とは、町境に設けられた木戸の開け閉めを行う者だ。

「番人」

背後から低い声がして、そちらを見ると小者と目明しを連れた定町廻り同心の旦那が、木戸を挟んだ反対側にある自身番へ声を掛けていた。障子を開け放った小屋の中から「ハァー」と返事が聞こえる。この月は自分たちの長屋の大家でもある爺さんが月行事(がちぎょうじ)五人組として詰めていたっけ。そう言えば、なんだかんだ言っ

て店賃を一月待ってもらっていた。けして払わないワケではないが、今顔を合わせるのも気まずい。
「町内に何事もないか」
「へェーェ」
大家の鼻にかかった返事が聞こえた。ああやって答える時は、ちょっと気取っている時なのだ。
「磯次さんヨ、随分鼻声じゃァねぇか」
同心に同行していた目明しが聞けば、同心もうんと一つ頷いた。
「ここんとこィ、雨続きでなんとなしに底冷えしやがらァ。風邪でも引いたのじゃァねぇか」
「え、いえ。そう言う訳では……」
還暦を越えた老爺は戸惑ったように答えた。真冬だろうが朝は諸肌脱ぎにへっぽこ剣法の素振りを欠かさないあの爺さんが、風邪なんぞ引くわけがない。大家連中の中でも最高齢のくせに、まだ身体も頭もピンシャンしているのだ。それを

知っているのだろう、自身番に一緒に詰めている書役と店番が、笑ってはいけないと必死に堪えて逆に泣きそうなしかめ面をしていた。

書役は町内の算用をする役人で、店番は町内の店子が交代で自身番へ詰めるのだ。

「そうか、そいつぁ済まなかったな。まぁ、大事にしつくンねェ」

そういなせに言うと、磯次が答える前に同心一行は早足で次の町の自身番へ向かって行った。

自身番は木戸がある四辻から始まり、反対側の木戸まで、真ん中を貫く通りを挟んだ両側の町屋とその後ろにある裏長屋を含めた一町を受け持つ。この町は広いから、目の前の自身番が受け持つのはこの町だけだが、隣町とその近隣は区画上町が小さいため、自身番を共同で使っているそうだ。

自身番には、亭主と取っ組み合いの物を投げ合いの大騒ぎの喧嘩を仕出かして、仲裁されるのに一度だけ行ったことがある。表には下手人を捕えるための刺股(さすまた)なんぞが立てかけてあり、番屋の奥には下手人や不審者と留め置く座敷が

あって物々しいところだった。
一方で、木戸番の方はまだ馴染みがある。むしろ家族全員が何かしら世話になっていると言っていい。自身番に比べて番小屋というよりも、雑多な品物がたくさん並んだ店にしか見えないからだろうか。
自身番に詰めている者たちは他に起居する家があるが、番太はこの木戸番屋が生活の場でもあった。
番太の本来の仕事は木戸の開け閉めである。木戸は朝明六つ（午前六時ごろ）に開けられ、夜四つ（午後十時ごろ）になると閉じられる。木戸が閉められた後に町内に入ろうとする人を木戸脇に設けられたくぐり戸から通し、通り抜ける者には何処へどういう理由で通るのかと言う理由を問いただす。そして、送り拍子木と言い、次の木戸へ人が通り抜けると言う事を知らせる為に拍子木を打った。例外として医者と産婆だけは理由を言わなくても通り抜けることが出来た。
木戸は犯罪を未然に防ぐための物だ。
また、番太は拍子木を打ちながら夜の町内を巡回して回る。火事、犯罪を未然

に防ぐ為の防衛策であった。犯罪を犯せば、一族郎党、または店子の責任者でもあった大家など罰を被る範囲が広いため、町内経営でそうした防犯の仕組みが作られていた訳である。

しかも、仕事はそれだけではない。昼間でも、将軍など貴人の御成りや府命、水道普請や断水、僧侶が寺社や仏像建立の為の寄附を募る御免勧化の到来などを、金棒を引き引き町内へ知らせたりするほか、果ては細々とした町内の雑用などの処理も任されている。

そうした役目を務める者は独身者に限るとされていたが、その実夫婦者も多かった。町内から賃金を貰っていたが、到底それだけでは暮らしていけない。そのため昼間の副業が認められ、細々としたものを商っていたのである。夏には金魚、冬には焼き芋を売り、この町でも大層な人気を博すほど。

要は朝から晩まで働き詰めなのだ。

時には、捕り物の時に木戸に囲まれた町内から罪人を逃がさないようにするのも彼らの仕事だ。と言っても、する事と言えば、通常は木戸を閉めるだけだ。だ

が、ここの番太は違う。罪人が木戸で暴れるような事があれば大立ち回りをしてのけ、絶対に逃がさないのだ。

狭い町内のこと、番太がお縄にかける手助けをしたとあれば、評判にならないはずがない。その証拠に、大人たちは口々にここの番太を誉めそやしてやまない。となれば、是が非でもそんな番太を見てみたいと思うのは、夢多き少年であれば、当然のことかもしれない。母はヤレヤレと一つ溜め息を吐いて歩み去った。

芳之助が手習いの師匠の下へ走りながら、今日こそは目一杯粘ってやろうと考えていようとは、知る由もなかった。

番太の活躍を一目見たいと番小屋を見張るようになって一月余りになるが、番太は店の奥で眠りこけているか、用事で町内に出て留守かのどちらかだ。女房も眠そうな目でけだるげに店番をするばかり。ある日、近くで良く見てみようと小間物屋を物色するフリを装ってみたが、逆にこそ泥と間違えられて女房に凄い剣幕で追い払われる始末だった。それでも吉之助は諦めない。

今日は見られるかもしれない。そうだ、おッ母さんに頼んでお弁当にしてもら

おう。

芳之助が昼時の長屋を駆け抜けて、腰高障子をがらりと開けた。

「おッ母さん、おッ母さん」

「どうした、そんなに慌てて」

「あのね。あのう、今日はお弁当にしておくれよな」

「一体どうした訳だ。食べてお手習いに行けば良かろうに」

「それでも、ヨウ……」

「もう膳にしたわいナ。とっととお食べ」

芳之助はがっくりと肩を落としたが、いや、それなら早く食べてお師匠さンの所に戻る前にまた番太を身に行けばよい、と思い直して銘々膳の前について、ご飯をかっ込み始めた。

「エエ、行儀のわりィ。よそ様が笑うじゃねェか」

母親はそう怒鳴ると、ごつり、と拳骨を食らわせた。

芳之助は最後の一口を放り込んで、もぐもぐと口を動かしたまま白湯を茶碗に注いで始末をすると、母の怒鳴り声を背に聞きながら、長屋を走り出た。少しでも早く木戸番にたどり着きたいのだ。

息を整えながら定位置にしゃがみ込む。

木偶じゃなかった……。

芳之助は目を見張った。女房がいつもの店番をしている位置に横座りして、楊枝を使っていたからだ。昼飯を食べたばかりなのだろう。冷やかしか、通りすがりに見せの品揃えに目をやる人たちに鋭い目を向けながら、一方の手は気だるげに懐に仕舞われている。

いつもと違う様子を目にした事で、吉之助は興奮に目を輝かせた。身動ぎもしない芳之助を何だと思ったのか、野良犬がふんふんと匂いを嗅いでいた。

昼時を一刻ほど過ぎると、お手習いも終わりである。芳之助はお師匠さんの家を、仲間たちと転がり出るように駆け出す。気が急いているのだ。

「おおい、芳坊」と遊びに誘う仲間の声に耳も貸さず、芳之助はひたすら駆け

て辿り着いた木戸番には客がいた。江戸に着いたばかりの旅人らしい。鼻紙か何かが足りなくなったついでに、道でも聞いているのか、いつもは人形のように動かない女房が対応していた。その後ろに見えるのは、亭主の番太だ。眠そうに目を擦りながら、煙管を吹かしている。

今日こそは何か見られるに違いねェ。

ところが、旅人が去った後はいつもと同じで女房は店番に座ったきり。番太も今日は暇なのか、その後ろの座敷でぼんやりと帳面を繰ったり、煙管を吹かしたりしている。

……飼い猫だったのかぁ。

芳之助は番太の膝で丸くなっている白い猫に気が付いた。しかし、待てど暮らせど木戸番では何も起こらなかった。段々と陽が傾てくる。通り過ぎる人たちが芳之助に「早くお帰り」と声を掛ける。芳之助は「お父ッつぁんをお出迎えサ」と言い訳してやり過ごしていたが、町が薄紫に染まる頃になってくると、さすがにそんな言い訳も通じなくなってくる。

「お父ッつぁんなら、もうお帰りだろう。早く帰ェンな。おッ母さんも心配してるだろう」
「ううん、それでもここを通るはずだもの」
必死に木戸番の方を伺いながら芳之助は何とか粘っていたが、
「さぁさぁ、我侭を言わずとお帰り。おれが送っていってやろう」
と手を掴まれては流石に言い訳できない。しょんぼりと項垂れて芳之助は帰途についた。「芳坊が帰ってこない」と蜂の巣を突いたような騒ぎの中に、見知らぬ男に送られて帰ってきた芳之助は、母親と父親にがっちりと叱られた。

その夜。
御用笛が鋭く夜気を切り裂く。御用提灯が町内のあちらこちらで灯されている。さぞ物見高い野次馬が出るだろうと思うが、そうではない。巻き添えを食わないため、そして捕り物の邪魔にならないように町人は家の中に閉じ篭っている。それでも気になるのが裏長屋の連中だ。こちらも夜は閉じられる裏長屋の木

戸に詰め掛けると、細く細く戸を開け、息を詰めて様子を窺う。表通りに面した店では、障子の隙間や二階からやはりこっそりと様子を窺う。

一方、定町廻り同心と目明しは張り切っていた。一月かけて水面下で動いて、やっと盗賊の一味を追い詰めたのだ。一味が今夜動くとの情報を得て、満を持しての捕り物である。一味は押し込みに入った大店を取り囲まれる前にいち早く裏口から逃げ出していた。目明しの手下が大声で叫びながら一味を追いかける。捕り方も縄や梯子を抱えてその後を追う。

木戸を打ち破って逃げようとする一味を、老いさばらえて何の役にも立たないと見えた番太が待ち構えていた。人が違ったような動きで暗闇から走り出ると、稲妻のごとき速さで芯張り棒を振り回し、十数人からなる盗賊の一味をばったばったと叩きのめしていく。女房はその後ろから火吹き竹で更に逃げようとする一味を昏倒させていく。

日頃からでは信じられないことだが、実はこの夫婦、一刀流の免許を持つ武士だったのだ。遠国の勤番侍だったらしいが、理由があって追われ、食い詰めた挙

句犯罪に手を染めかけた所を、同じく同心であった堀井忠道の父に見逃され、名を変え番太として勤めることになったのだ。長い歳を経る間に町人の振舞いを身に付け、今では武士の出と知る者は、忠道の父と、それに仕えていた十兵衛のような老練の目明しだけだ。

番太とその女房が縄を掛けるわけには行かないが、こうして一味を足止めしている内に目明しの手下たちが加勢に入り、捕り方が追いついて無事お縄となった。

捕り物から一夜明けて、芳之助の暮らす長屋も昨晩の話で持ちきりだった。一味が逃走の際にこの長屋の前を駆け抜けて行ったのだ。おまけに誰が見ていたのか、またしても番太夫婦の大活躍の話がぶち上げられる始末。芳之助は表で繰り広げられるその話を聞いてそわそわと落ち着かなかった。昨晩の騒ぎで目を覚ましていたのだが、母親が長屋から出ることを許さなかったのだ。一方ケンカと火事に目のない大工の父親は、御用笛を聞いた途端に外へ飛び出し、なんと裏長屋の屋根に登って見ていたらしい。視界に限りがあるが、それでも逃げる盗賊一味

とその後を追う捕り方達を、隣長屋の刷毛師とやんやややんやの歓声を掛けながら見物していたそうだ。

それは当然ながら町方に知られていたらしい。

「危ないから覗いてはならぬ、屋根からの見物など以ての外である、と厳しいお叱りが来ましたよ。店子から怪我人を出したとあっちゃァ、あたしも大家の名折れだ。ナニ、別にあたしの名が心配なんじゃない。店子は子も同然、賊どもが行きがけの駄賃とばかりに押し入ってきて怪我をしたり、見物なんぞして屋根から落ちでもしたら生活が立ちいかない上に、店賃の支払いも滞って大変だろうと、心配だから言うんです。良いですね、くれぐれも頼みましたよ」

と大家の爺さんがネチネチと嫌味を言って帰って行った。

また、番太は寝ているようだ。店番は相変わらず眠そうな女房だ。しかし、今日は心なしか頼もしいように見えた。

「チョッチョッ」

芳之助は傍を歩いてきた白い猫を招き寄せた。猫は芳之助の指先をふんふんと嗅ぐ。芳之助は袂から削り節を取り出した。朝の膳に出た削り節を、ふと思いついてくすねて来たのだ。それに引き寄せられるように白い猫が芳之助の削り節を嗅いで、ぺろり、と舌なめずりをした。

「よしよし」

芳之助が焦らすように削り節を振ると、にゃぁー、と猫がねだった。削り節を与えると、逃がさないように猫を抱き上げて、芳之助は番小屋の方へ歩き出した。

――――　扇坊　筆

（『時代屋』より加筆修正）

0726# エアブー City&Fes2020

寝床屋の無料配布

2020/07/26 刊
URL: http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/
Mail: nedocoya@gmail.com
Twitter: @nedocoya4pr

ようこそお出で下さいました。
この度はお手に取っていただき有り難うございます。

エアイベントに参加しよう、と思い立ち、折角ならば
無料配布を作ったらいかがなものかと二人で相談した
結果、このような仕儀と相なりました。
ご覧いただきましたように、江戸時代を中心に
あんまり剣豪とかが出てこないお話を、
番頭さんことかわなをと、丁稚こと扇坊の二人で
書いております。

少しでも楽しんでいただければ幸いです。

＊おねがいとおことわり＊

本書について、以下の行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

・有償無償を問わず、本書の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する行為。

・本書を有償にて再配布する行為。

本書は無料配布として作成したものです。